

歴史にどう向き合うか！

私事に及ぶことをお許し願いたい。大学入学金（確か18万円）を支払った直後、日吉の書籍部で衝動的に購入した本2冊。ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』と丸山真男の『現代政治の思想と行動』であった。前著は電車内で読めど進めど内容がサッパリだった。後著は拙宅近くの安針塚まで持参し、陽だまりを心地よく受けながら、頁を捲ったことを昨日の事のように想い出す。いずれも大学生となった高揚感がそうさせたのだろう。

しかし当時は大学紛争真っ盛り。足はキャンパスから葉山のハーバーへ向うこと頻りだった。それでも3年生となると「アカデミック」という言葉が新鮮で、クラブ合宿所から入ゼミ面接へ出向き、初めて恩師となる人物と面会。そこから日本外交史にのめりこんだ。私にとって生涯忘れ難い歴史学者が二人。一人はゼミで特別講演して下さった入江昭先生（当時シカゴ大学教授）。名著『日本の外交』のしなやかな歴史解釈に、私は脳天に一撃を食らった思いがした。「学問とは何ですか」と食い下がると、「創造性と実証性です」と諄々と説いて下さった。考えもしなかった大学院へ進んだ夏、シカゴの先生宅を迷いながら訪ね当て、「石橋湛山研究に決めました」と報告すると、「大変良い研究ですね」と大いに褒めて下さった。^(注) その褒め言葉こそが、今日まで続く私の湛山研究の動機だったともいえる。

ある日、修士論文をもって押しかけた先は橋川文三先生（当時明治大学教授）宅。それまで一面識もなく、ただ一連の著作に魅せられていた。桜上水の、とある寂れたアパートであった。ドアを開けると靴入れの上に何気なく本が散乱している。襖の間から、山のような本に囲まれた先生の書齋が見え、その迫力に圧倒された。通されたウナギの寝床のような客間で先生に対座した私は、単刀直入に「先生はなぜ歴史を研究されているのですか」と尋ねた。何かニーチェ的な奥深い回答を期待していた。ところが先生の答えは「おもしろいからです」という意外な一言だった。私は拍子抜けして、生意気な言葉をもって反論した。先生は「困ったな」という顔をされていた。今もって、赤面の思い頻りである。

以来30余年の歳月が流れ、私もすでに当時の入江、橋川両先生の年齢を超えるに至った。今では外交史の講義初回には必ず、両先生との対話を思い起こしながら、学生諸君に対して、「歴史のおもしろさ」を説き、毎回の講義では「学問のおもしろさ」を知る喜びを伝えたいと心がけている次第である。

（現代史研究所所長 増田 弘）

(注) のちに知ったことであるが、入江先生の叔父片桐良雄氏は石橋大蔵大臣秘書官を勤め、同氏は英和女学院の評議会議長も務められた。また入江先生の御母上も妹君も英和の御出身であった。不思議な因縁を感じた。

現代史研究所・生涯学習センター共催講演会

テーマ『世界の子供と家族』

講師：湯沢雍彦 お茶の水女子大学名誉教授

2007年7月19日 横浜キャンパス

湯沢雍彦教授による「世界の子供と家族」との題の講演会が、7月19日（木）に横浜キャンパスで開催され、約150名参加し、和やかな盛会となった。一時間半にわたるお話は、湯沢先生がご自身で撮影された写真を映写しながら、特に北欧諸国を中心にそこでの家族生活・子育ての事情などを紹介、日本と比較するものであった。とくにデンマークの例では、地域の大人が子どもとの生活に時間をたっぷり割く様子がわかり、「国民がそのような生活を選び取った」との社会学的考察が印象的であった。



湯沢雍彦先生

(現代史研究所幹事 長谷川かおり)

現代史研究所主催講演会

テーマ『これからの日中関係をどう考えるか？—誤解を超えて』

講師：岡部達味 東京都立大学名誉教授

2007年10月11日 横浜キャンパス

「これからの日中関係をどう考えるか？—誤解を超えて」と題された岡部達味教授による講演は、ご自身の特徴的なお名前の由来についての言及に始まり、本論である日中関係の将来に向けてのお考えを、1972年の国交正常化の以前や以後といった歴史の時空を自由に飛び交いながら聴衆に語りかけるものであった。これまでの情緒的な日中関係を脱して、日中が共通利益を一緒に守って友好関係を築いていくことの大切さを、学生を中心にした参加者は深く感じとったように思われた。



岡部達味先生

(現代史研究所幹事 望月敏弘)

現代史研究所シンポジウム

テーマ『日本の国際貢献はどうあるべきか—日本とPKO—』

パネリスト：花田貴裕 外務省総合外交政策局

国際平和協力室首席事務官

瀬谷ルミコ 特定非営利活動法人日本

紛争予防センター事務局長

山田 満 本学教授

コーディネーター：増田 弘 本学教授

2007年11月16日 横浜キャンパス



左より花田、瀬谷、山田、増田 各氏

政府開発援助（ODA）が削減されるなかで、日本の国際貢献をいかに行うべきか。実際に国際協力の現場や政策作成に携わっている政府、NGO、研究者の3者が、自らの経験も踏まえて活発な議論を展開した。平和維持活動（PKO）を主要なテーマに掲げたが、すでに第2世代PKOには、停戦監視などの軍事的側面だけではなく、人権、選挙、制度構築などむしろ多様な専門性を有する民間人が必要とされている点も議論になった。「顔の見える」国際貢献とは何か、改めて聴衆者とともに考える機会になった。

（現代史研究所幹事 山田 満）

現代史研究所・生涯学習センター共催講演会 テーマ『中国はどこへ向かおうとしているのか』

講師：呉寄南 上海国際問題研究所主任研究員

2007年12月11日 横浜キャンパス

中国は10月に共産党第17期全国代表大会が開かれ、新指導部選出とともに今後5年間の政治経済方針を決定した。胡錦濤はじめ5名が政治局常務委員として残留したが、習近平（54）と李克強（52）が次世代の代表となることが明らかとなった。そして胡錦濤の「科学的な発展観」が党規約に明記された。これは毛沢東思想が明記されて以来のことである。今後5年間に胡錦濤色が強くなる反面、経済面における労働力不足、過剰流動性、不動産投機、貧富の格差、環境汚染など難問が山積しており、胡政権の試練を迎えている。

（現代史研究所所長 増田 弘）



呉寄南先生

現代史研究所・生涯学習センター共催講演会 テーマ『忘れられた大災害

大正期インフルエンザの大流行』

講師：速水 融 慶応義塾大学名誉教授

2007年12月13日 横浜キャンパス

2007年12月13日に、東洋英和女学院大学横浜キャンパス5201教室において、慶応義塾大学、国際日本文化センターおよび麗澤大学名誉教授である速水融先生による講演が大正期インフルエンザの大流行について行われた。参加者200名以上の盛会であった。デモグラフィ（人口動態学）の立場から、このインフルエンザ流行の史実を整理し、統計の現代ほど整備されていない大正期の新聞や軍隊、地方自治体の資料から丁寧に掘り起こして当時の事情を明晰に推測してゆく手法は、歴史人口学の面白さを十分に伝え迫力があつた。

（現代史研究所幹事 長谷川かおり）



速水 融先生

2007年度現代史研究所 研究プロジェクト

(1) 「戦後復員・引揚・慰霊に関する総合的研究」

代表者：増田弘

共同研究者：加藤陽子（東京大学大学院）・佐藤晋（二松学舎大学）・浜井和史（外務省外交史料館）

(2) 「第二次上海事変（1937年）の研究」

代表者：望月敏弘

(3) 「家族と子どもの生活史研究」

代表者：長谷川かおり

共同研究者：川崎末美・野口晴子・星順子・上笙一郎（児童文化研究者）・猿渡土貴（成城大学）・小林淑恵（慶応大学大学院）・湯沢雍彦（御茶ノ水大学名誉教授）

2008年度現代史研究所 研究プロジェクト

(1) 「戦後復員・引揚・慰霊に関する総合的研究」（継続）

代表者：増田弘

共同研究者：加藤陽子（東京大学大学院）・佐藤晋（二松学舎大学）・浜井和史（外務省外交史料館）

(2) 「琉球弧の重層性を歴史・文化・社会・文学の観点から読み直す」

代表者：与那覇恵子

共同研究者：中生勝美（本学教授）、鈴木智之（法政大学教授）

現代史研究所 2008年連続研究講座

世界の危機と紛争

第1回	4月	アラブ対イスラエル紛争	池田 明史 本学国際社会学部教授
第2回	5月	アメリカ対イラク	酒井 啓子 東京外国語大学教授
第3回	6月	台湾海峡危機	松田 康博 東京大学東洋文化研究所研究員
第4回	7月	東チモール紛争	山田 満 本学国際社会学部教授
第5回	10月	朝鮮半島危機	倉田 秀也 杏林大学総合政策学部教授
第6回	11月	日中紛争	望月 敏弘 本学国際社会学部教授
第7回	12月	アフリカ紛争	武内 進一 アジア経済研究所主任研究員

東洋英和女学院大学 横浜キャンパスにて 日程はポスターでご確認下さい。

開催時間は木・金の4ないし5限目です。世界の複雑な現状をわかりやすくお話しします。皆様奮ってご参加ください。

発行：東洋英和女学院大学 現代史研究所 神奈川県横浜市緑区三保町32

TEL 045(922)7272

FAX 045(922)7272

E-MAIL gendaiken@toyoeiwa.ac.jp